

『魏書』倭人条の「五尺刀」「銅鏡」と
倭の海民

石 野 博 信

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

『魏書』倭人条の「五尺刀」「銅鏡」と倭の海民

石野博信

はじめに—丹後・弥生文化の特性—

20数年前、丹後の弥生文化を中心とする講演会・シンポジウムに参加したとき、その特性をつぎのように要約した。今読みかえしても対外交渉に関して一層、その感が強い。その頃すでに網野善彦氏は『海民と日本社会』（新人往来社、1998）を刊行しておられ、触発されることが多い。一例をあげれば「12世紀末までには——海民的職能集団——廻船人、商人、さらには海を従える海の領主たちも、自らの活動を自由かつ有利に展開するために、こうした支配者たちと結びつくことを積極的に望んでいた」（30・31頁）。

網野さんとお会いしたのは1980年代の中頃、伊勢・桑名の旅宿で大林太良・森浩一氏らと談論風発の席だった。私は末席でひたすら聞かせてもらうだけだった。

鉄・玉・ガラス器具の生産

1995年10月、弥栄町奈具岡遺跡で日本列島最古・最大の鉄工房群が見つかった。奈具岡遺跡だけではなく、丹後弥生人は各地で鉄・玉・ガラス器具を生産していた。同じことは九州弥生人はやっていたが、「畿内」弥生人はやっていない。祭具である銅鐸などの青銅器生産は熱心であったが、鉄器の大量生産は近畿では淡路島に集中する。

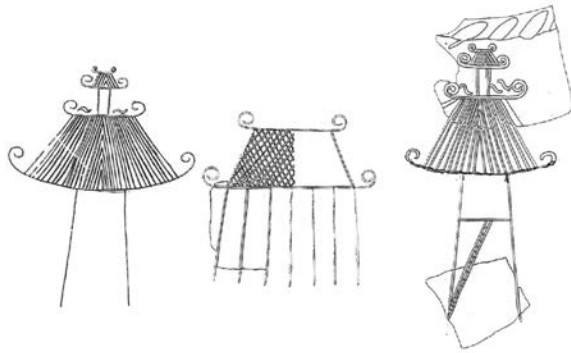
丹後の「鬼」伝承

丹後には「鬼」の伝承がある。「鬼」は地域の英雄であり、ヤマトにとっては不都合な存在であった。イヅモのオロチ・キビのウラ・ヒダのスクナなど各地に英雄は存在し、みんなヤマトと戦って破れた、という。はたしてそうだろうか。少なくとも、それぞれの地域に独自の伝統文化があったことを示しているし、ヤマトを介さずにカヤ・シラギなど海外との交流伝承を持つ地域である点が重要である。丹後文化の独自性は少なくとも弥生前期に始まり、古墳時代へと継続する（石野1998）。

1. 『魏書』以前の大和の大陸文化

(1) 1世紀の楼閣建築(第1図)

奈良県田原本町唐古・鍵遺跡と隣接する天理市清水風遺跡は弥生中期末の絵画土器が多いことで著名である。中でも異質なのは、1棟の平地建物の両側に建つ楼閣風建物は中国・



双阙・凤鸟・楼閣（局部）



第1図 弥生の楼閣絵画(上)と洛陽漢画(下:黄明兰 1986)

地区の纏向2類(豊岡1999)の土坑に仮面舞踏用具の一部が埋納されていた。仮面は木製鋏の刃部を逆転用して、円形の柄孔を口、その上の柄孔補強用に厚く残した部分を鼻に、鋏刃に近い薄い部分を細長くレンズ状に穿孔眼とし、その上に眉を描き、高さ26cm、幅21.6cmの顔ができた。

戈柄は長さ48.2cmで、上端の戈孔は戈柄にはほぼ直交する。木盾片は長さ15.2cm、幅2.7cm、厚0.5cmの小片だけで、4cm間隔で盾面を紐で綴じ、外面を朱彩する。

なお、専用木製仮面の破片は同じ桜井市大福遺跡の弥生末・古墳初の土坑から単品で出

洛陽漢画を彷彿とさせる。

洛陽漢画では、3階建物とも見える楼閣両側の屋上に鳥が立つ門楼が描かれる。その眼で唐古・鍵絵画をみると、2階の屋根上の~マークが鳥の象徴に見えてくる。

弥生中期末・前1世紀~後1世紀の唐古・鍵遺跡に楼閣建築があったとは考え難い。私はその時奈良市在住の宮大工である木村房之さんに聞いた。`中国・漢の大工1人くれば、弥生中期に楼閣建築を建てることは可能でしょうか?。と。木村さんは少し考えて`加えて中国人の助手1人欲しい。宮大工2人おれば、他の地元の大工を仕込んで何とか可能。と答えてくれた。

弥生中期末の奈良盆地には中国人が在住した痕跡がない。その上での質問であり、回答だった。

(2) 2世紀の仮面舞踏・方相氏

奈良県桜井市纏向遺跡太田

土しており、仮面舞踏の一定の普及を想像させる。ただし、大福仮面には耳に相当する部分に穿孔があり、仮面を着装して舞台に登場する舞踏と太田仮面のように耳部穿孔のない手持仮面舞踏の2種がすでに2世紀段階にあったことを思わせる。

林已奈夫氏によると、右手に戈、左手に盾を持つ人物図は、中国では前2000年以來存在しており奥は深い(図3、林2009)。日本列島では、邪を払う神を先導する方相氏は6世紀末の奈良県藤ノ木古墳出土の鞍金具文様に描かれた人物像が想起される。他方、現代の祭礼、例えば2018年に見学した平安神宮追儺式の方相氏は、白い仮面を付け右手に矛、左手に盾を持って邪神を追う。後には子供たちが付き従っていた。

はるかにさかのぼる2世紀の奈良盆地東南部に仮面舞踏が波及していたのだろうか？

2. 倭の女王・卑弥呼と台与(壹与)の政治状況(『魏書』倭人条、抜書)

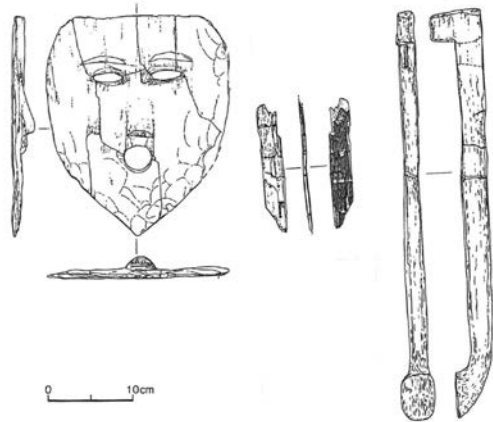
女王卑弥呼——男弟一國を統治

男子一卑弥呼の辞を傳達

卑弥呼居館——宮室・樓觀・城柵あり、常備兵が守衛

外交 景初3年(239)

6月 魏都・洛陽へ使節団を



「方相氏」の追儺儀礼を思わせる仮面・戈柄・盾(纏向遺跡、3世紀)(福辻2013)



中国漢代画像磚に描かれた方相氏(末永雅雄先生旧蔵陶板画(左右約50cm))

第2図 後2世紀・奈良県纏向遺跡の仮面・戈柄・盾と漢代方相氏(模刻)



第3図 戈と盾を持つ人(記号 前2千年紀末)(林已奈夫 2009)

派遣

12月 魏皇帝の詔書

卑弥呼「親魏倭王」とし「金印紫綬」を仮す

織物類多数(省略)、金八両、五尺刀2口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹

使節 難升米一卒善中郎将

牛 利一卒善校尉 銀印青綬

正始元年(240) 太守弓遵、詔書・印綬を齎し倭王に拝仮

〳 4年(243) 使大夫8人派遣(生口、倭錦、など上献)

〳 6年(245) 難升米に黄幢を賜う

内乱 〳 8年(247) 太守王頎、宮に至る

卑弥呼、狗奴国男王・卑弥弓呼との争討を報告。魏・張政を派遣し、
詔書・黄幢を難升米に拝化し檄を為り、告諭す

卑弥呼死 正始中(240~248)

卑弥呼死す。大いに冢を作る。径百四步殉葬者・奴隸百余人

台与女王 男王立つも争乱

卑弥呼の宗女、台与女子治まる

台与、張政を送り男女生口と白珠、青大勾珠、異文雜錦など貢
す

3. 3世紀の「五尺刀をもつ墳墓」(第4図)

前章で要約したように、『魏書』倭人条では、景初3年(239)6月に魏の皇帝は倭の女王・卑弥呼を「親魏倭王」とし、「金印紫綬」を仮すと共に多種の絹織物と共に、「五尺刀2口、銅鏡百枚」などが仮授された。

多くの下賜品の中から五尺刀と銅鏡を特記したのは、同種だけが考古資料として残存しうるからで、はじめに「五尺刀」について検討しよう。

魏の一尺は現代メートル法の24.3cmに該当し、従って五尺刀は121.5cmとなる。そこで日本列島出土の3世紀で長さ110cm前後の鉄刀をまとめたところ、西は筑前(福岡県)から東は越前(福井県)の日本海沿岸に5本の長刀が集中する。長さが最も近いのは全長118.8cmの筑前・志摩市上町向原遺跡の鉄刀だ。それに類するのは、鳥取県宮内第1遺跡、兵庫県豊岡市妙楽寺4A号墳、同・丹波篠山市内場山墳丘墓、福井県松岡町乃木山墳墓と日本海沿岸に集中する。

参考に図示した長野県木島平村根塚遺跡の渦巻環頭鉄剣は韓半島系で、信濃川を通じて

- 1 福岡県 志摩市 上町向原
- 2 鳥取県 東郷町 宮内第1
- 3 兵庫県 豊岡市 妙楽寺
- 4 // 篠山市 内場山
- 5 福井県 松岡町 乃木山
- 6 長野県 木島平村 根塚
- 7 大阪市 崇禅寺



第4図 3・4世紀の「5尺刀」と馬具・馬齒(石野博信2014)

日本海に注ぐ。

他方、日本列島の太平洋岸には3・4世紀の馬具・馬齒が集中する。とくに倭国女王・卑弥呼墓、あるいは台与墓に比定される奈良県桜井市箸中山古墳(箸墓)の円丘部裾の内環濠出土の木製鏡の共伴土器群の大半は纏向3～4類(旧庄内式)で一部、纏向5類(布留1式)を含む。つまり、日本列島での乗馬の風習は古くても5世紀中葉と考えられている今、

新しくみても3世紀末・4世紀初頭の古墳内環濠に乘馬に際して足をかける鐙が含まれていた。

その上、奈良県香芝市下田東遺跡の4世紀・布留式の完形土器群と共に木製鞍があり、奈良盆地での乗馬の風習がたとえ、一部の人々の間であったとしても少なくとも4世紀初頭にさかのぼる可能性が見えてきた。さらに、山梨県甲府市塩部遺跡の4世紀の五領式土器と共伴する馬歯や、長野市浅川端遺跡の馬形帯鉤など乗馬の風習はさらに北上しそうだ。

2・3世紀の「五尺刀」に近い長刀をもつ墳墓はいずれも群集墳内の小古墳である。つまり、地域の小首長一族の構成員クラスが「五尺刀」に近い長刀を保持し墳墓に副葬している。

同じ傾向は、3世紀の紀年銘鏡所有古墳に認められる。

4. 3世紀の紀年銘鏡をもつ墳墓(付表1)

日本列島出土の3世紀の紀年銘鏡は付表1のとおり13面あり、青龍3年(235)から元康年間(291~299)に及ぶ。そのうち、広義の日本海沿岸の古墳は、京都府大田南5号墳、島

付表1 3世紀の紀年銘鏡をもつ墳墓

	紀年銘鏡	紀年	出土した古墳	古墳の形
1	青龍三年方格規矩四神鏡	235年	京都府峰山町・弥栄町 大田南5号墳	方墳
2	青龍三年方格規矩四神鏡	235年	大阪府高槻市 安満宮山古墳	方墳
3	赤烏元年対置式神獸鏡	238年	山梨県三郷町 鳥居原古墳	円墳
4	景初三年画文帯同向式神獸鏡	239年	大阪府和泉市 黄金塚古墳	長突円墳
5	景初三年三角縁同向式神獸鏡	239年	島根県加茂町 神原神社古墳	方墳
6	景初四年斜縁盤龍鏡	240年	京都府福知山市 広峯15号墳	長突円墳
7	景初四年斜縁盤龍鏡	240年	辰馬考古資料館蔵 伝宮崎県持田古墳群	
8	正始元年三角縁同向式神獸鏡	240年	兵庫県豊岡市 森尾古墳	方墳
9	正始元年三角縁同向式神獸鏡	240年	群馬県高崎市 蟹沢古墳	円墳
10	正始元年三角縁同向式神獸鏡	240年	奈良県桜井市 外山茶白山古墳	長突円墳
11	正始元年三角縁同向式神獸鏡	240年	山口県新南陽市 竹島古墳	長突円墳
12	赤烏七年対置式神獸鏡	244年	兵庫県宝塚市 安倉古墳	円墳
13	元康□年対置式神獸鏡	291~299年	五島美術館蔵 伝京都府上狛古墳	

根県神原神社古墳、京都府広峯15号墳、兵庫県森尾古墳の4基で長突円墳の広峯15号墳以外は小規模の方墳である。

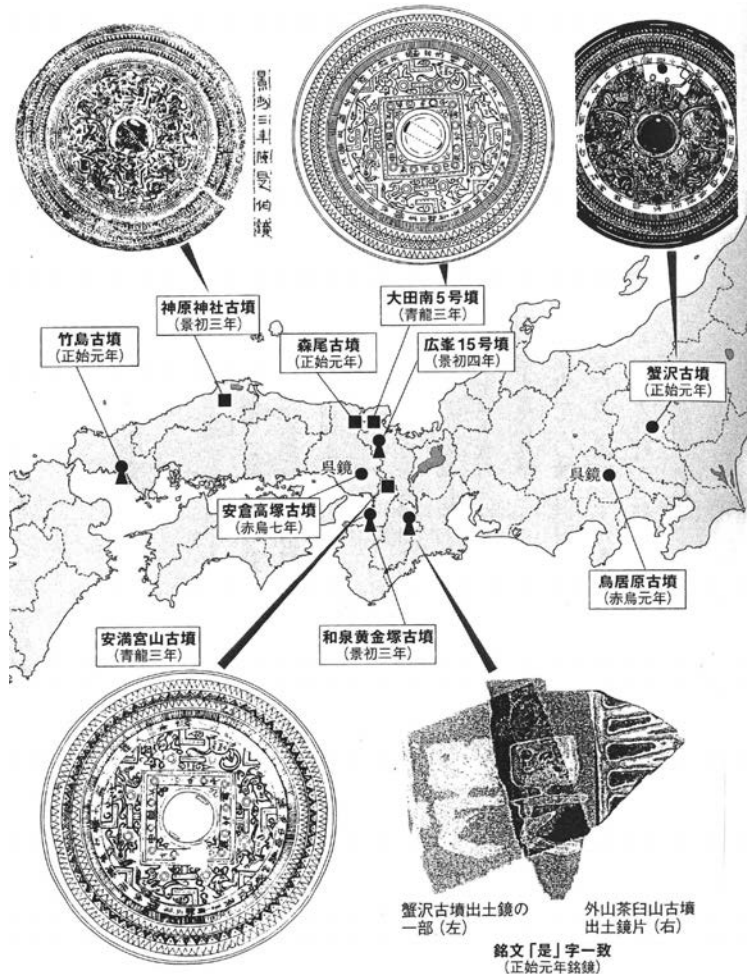
長突円墳である瀬戸内海沿いの和泉黄金塚、竹島両古墳は4世紀末か5世紀初頭ともされていて、3世紀の円墳・方墳被葬者とは異質である。つまり、3世紀の紀年銘鏡を副葬した3世紀の古墳はすべて小規模な方墳か円墳である。とくに、青龍3年銘鏡をもつ

丹後の大田南5号墳は古墳群内の小古墳であり、紀年銘鏡がなければ注目されることもなかったであろう。言い換えれば、3・4世紀の日本海沿岸の小古墳被葬者が紀念銘鏡を保有している、ということである。

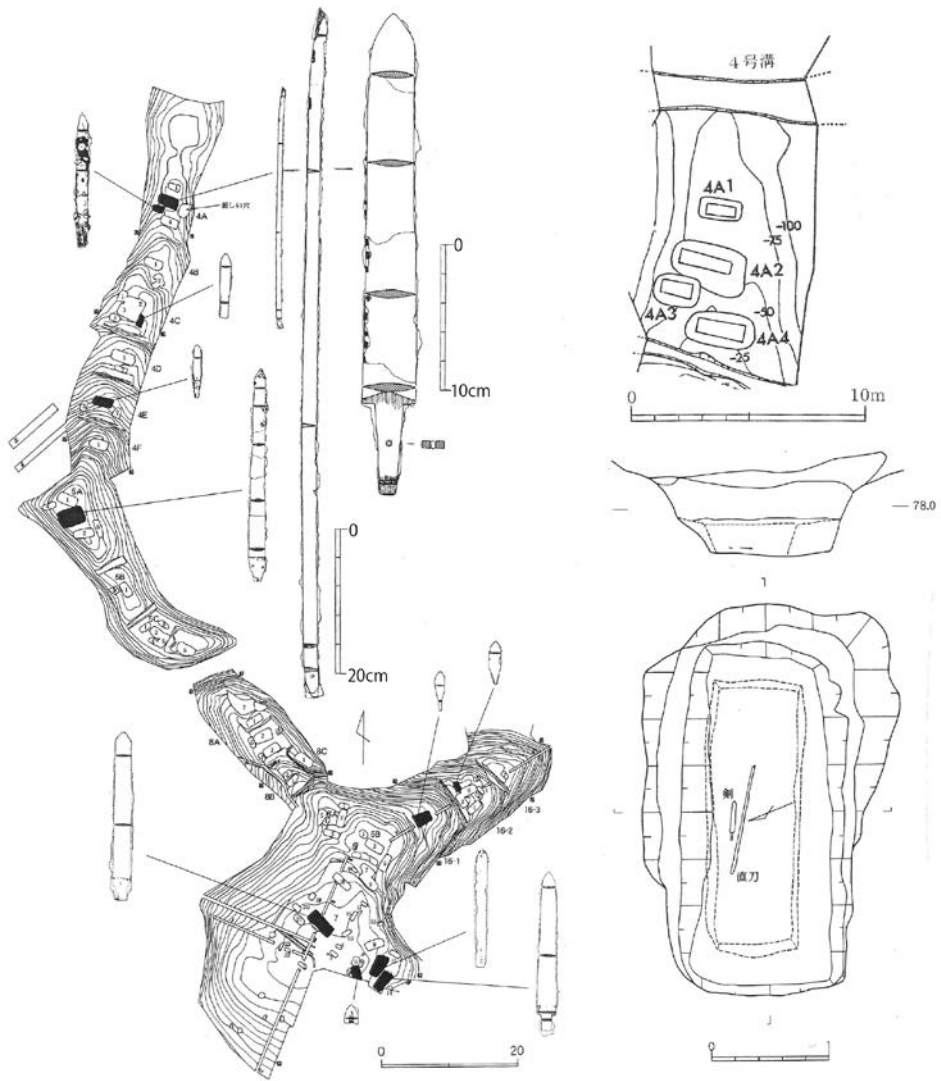
5. 3世紀・日本海沿岸諸国と倭の海民

前項までで、3世紀の類五尺刀と紀年銘鏡出土古墳のうち、類五尺刀は日本海沿岸に集中し紀年銘鏡出土12古墳のうち、6基が日本海側に類す。それを旧国名にまとめれば次のとおり(国名下の線は日本海側)

類五尺刀 筑前、因幡、但馬、丹波、丹後、越前



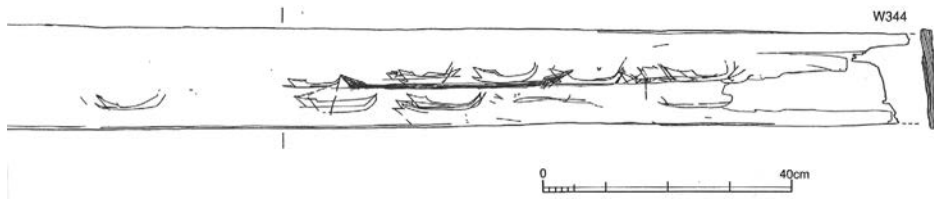
第5図 3世紀の紀念銘鏡の分布(石野2019)



鉄製武器類出土の埋葬施設

4 A 第2主体実測図

第6図 但馬の長刀をもつ墳墓—豊岡市妙楽寺4号墳—(瀬戸谷編2002)



第7図 但馬・袴狭遺跡の船団線刻画

紀年銘鏡 日向、周防、出雲、但馬、丹後、丹波、山城、摂津(2)、和泉、上野、甲斐

ただし、記・紀の記述では「鏡・劍」と記されていて古代倭人は、鏡を第一義に、劍を第二義的に扱っている。しかし、3世紀と限定できる出土古墳は日本海沿岸の出雲・但馬・丹後・丹波の日本海沿岸四ヶ国に限定されるのは重要である。そこで、3世紀前後の日本海沿岸のクニグニを検討しよう。

(1) 出 雲

出雲市山持遺跡^{ざんもち}ははじめ3ヶ所ほどの2・3世紀の遺跡から沓岐系土器と共に韓式土器と楽浪系土器が出土している。朝鮮半島北部の楽浪郡は中国・魏の植民地で漢人が占拠し、やがて半島中部の帯方郡に進出する。西暦239年に倭の女王・卑弥呼が遣魏使を派遣したときには、当然楽浪・帯方両郡太守の仲介を得ている。

松江市南講武草田遺跡には2・3世紀の近畿系土器が多く、近畿勢力が拠点としていた可能性が考えられる。3世紀の出雲系土器は、朝鮮半島南部をはじめ本州島の吉備や大和などに進出しており、主要な交流拠点の一つであった。

(2) 但 馬

3世紀の出雲市西谷3号墳の埋葬施設上には、但馬や因幡などの土器があつて、葬儀への参列が推定されている(渡辺貞幸1995)。3世紀の但馬は紀年銘鏡をもつ豊岡市森尾古墳や長刀をもつ豊岡市妙楽寺4A号墳があり、日本海沿岸の小古墳被葬者集団の一翼を担っている。

その上、4世紀の豊岡市出石町袴狭遺跡の船団を描いた板絵は、朝鮮半島出身の出石一族が播磨―摂津―近江を経て、但馬・出石に定着した、という記・紀神話を彷彿とさせる。

(3) 丹 波

福知山市広峯15号墳は、古墳群内の小型の長突円墳で、存在しない年号「景初4年銘」鏡をもつことで有名だ。漢では皇帝が没すると年号が代わるのは常識なのにその時、倭に在住していた漢人が製作を依頼したのだろうか？だとすると、漢年号鏡、即、漢製造とはいえない証左となる。

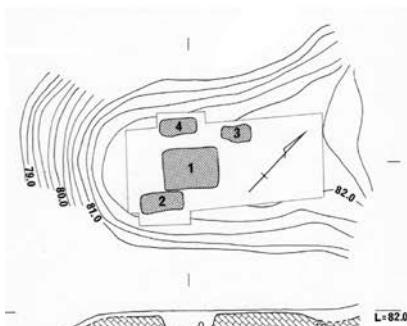
「倭に在住する漢人」は比較的小規模とはいえ、上層階層の墳墓である長突円墳に葬られる階層者で日本列島に漢文化を持ち込んでいることになる。これはまさに、かつて岡田英弘氏が『倭国』(中公新書、1977)で論じた倭国内の漢の植民地を想起させる。

(4) 丹 後

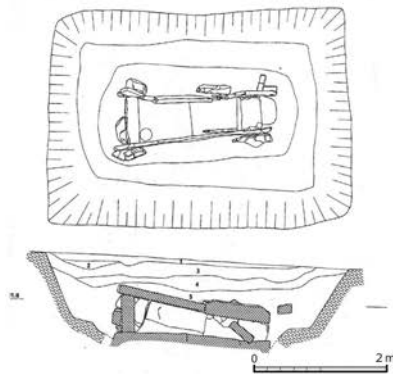
京丹後市大田南5号墳は、古墳群内の墳丘も残存しないような小古墳でありながら、青龍3年(235)銘鏡をもつ点で著名である。調査後、丹後で行なわれた講演会で樋口隆康氏



大田南古墳群配置図 (調査地内)



5号墳地形測量図



5号墳第1主体部実測図



5号墳出土方規矩四神鏡実測図

第8図 丹後・大田南5号墳と「青龍3年」銘鏡(横島・丸山編1998)

(元・京都大学教授)が冗談交じりで「私に銅鏡をくれるんだったら、2号墳出土鏡がいい」と述べられたほど、2号墳の方が墳丘・埋葬施設とも群内でトップクラスだ。

つまり、大田南5号墳は紀年銘鏡として歴史的資料価値は高いが鏡鑑としての価値は低い、ということだ。被葬者一族は海民として特段の功績があった銅鏡副葬クラスではある

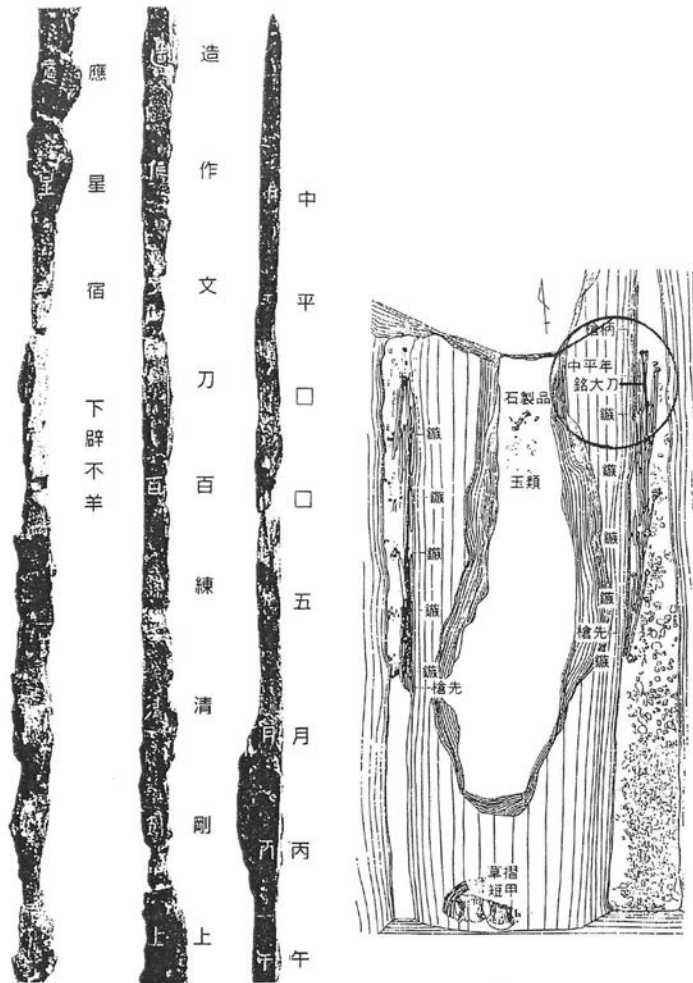
が、小古墳階層であった。言い換えれば一族の海民としての功労者ではあるが階層は高くはない人物ということになる。

— おわりに— 日本海沿岸小古墳被葬者一族の対外交易 —

1章で要約した『魏書』倭人条の「親魏倭王」印を賜うことに続く下賜品の筆頭に「縫地交竜錦」をはじめとする織物類が並ぶ。弥生～古墳時代の副葬刀剣や鏡鑑類に付着する織物痕跡が多いことは布目順郎氏をはじめとする研究によって知られている。

年代は新しいが、6世紀末の奈良県藤ノ木古墳発掘のとき、石棺内に侵入した雨水に浮遊する乾燥織物群が眼についた。おそらく、遺体に被覆された織物が乾燥し、雨水が侵入して浮遊したらしい。弥生時代にも遺体には衣服が着用され、被覆織物も用いられていたであろう。そう考えると、発掘調査のとき遺体身辺に副葬された刀剣、鏡鑑類を出土状況撮影のために水洗いしたことが悔やまれる。

類「五尺刀」や紀年銘鏡が日本海沿岸の小古墳に多いことを強調した。つまり、ヤマトの大王が中国・魏や韓のクニグニと交流し、その下賜品の一部を列島



第9図 後漢・「中平」銘鉄刀は棺外副葬—奈良県東大寺山古墳—
(金関恕1999)

各地の王に賜与したものではない。表日本である日本海沿岸各地の小古墳に葬られる階層の小地域王一族による商行為によって長刀も鏡鑑も輸入されたのだ。

邪馬台国を都とした女王・卑弥呼と台与(壹与)は倭王として魏・皇帝と外交し「親魏倭王」印をうけた。倭を代表する国家外交とは別に、列島各地の王が魏・呉・韓・楽浪と独自外交を行っていた、と考えられる。そう考えると、3世紀の長刀や銅鏡が日本海沿岸の小古墳に副葬されていることも理解しやすい。

倭国王が魏との外交権を一手に握り各地の小王たちに長刀や鏡の一部を下賜したのであれば丹後の大田南5号墳ではなく、2号墳の被葬者に賜るべきであった。想像を膨らませると、倭王は2号墳被葬者に紀年銘鏡を下賜したが、鏡質が悪く一族の5号墳被葬者に再下賜したのかもしれない。

奈良県東大寺山古墳の副葬品群の中に倭が魏と外交を開始した「中平」銘を刻んだ鉄刀が出土し、「卑弥呼の外交を」を示す大刀として著名だ。「中平」は後漢のA D 184~199年に相当し、女王卑弥呼が第1回遣魏使を派遣した239年の50余年前に当たる。ところが鉄刀は棺内副葬品ではなく、棺外の粘土槨に覆われた粘土床上の刀剣類の1本としての扱いである(第9図)。すでに対魏外交に際し、魏から賜られた鉄刀であることの意義は忘却されている。「五尺刀」の扱いもそれに近いようだ。

(いしの・ひろのぶ=当調査研究センター理事・兵庫県立考古博物館名誉館長)

参考文献

- 網野善彦1998『海民と日本社会』新人物往来社
石野博信ほか1998『弥生時代の考古学』学生社
石野博信2014「2・3世紀の日本海と甲・信」『邪馬台国時代の甲信と大和』二上山博物館 ふたかみ遊史会
石野博信2019『邪馬台国時代の王国群と纏向王宮』新泉社
金関恕1999「争乱を鎮めた大刀」『卑弥呼誕生』大阪府弥生博物館
黄明兰1986『洛陽漢畫像磚』河南美術出版社
瀬戸谷皓編2002『豊岡市妙楽寺墳墓群』豊岡市教育委員会
豊岡卓之1999『纏向 第5版補遺篇』奈良県立橿原考古学研究所
林巳奈夫2009『中国古代の生活史』吉川弘文館
福辻淳2013「纏向遺跡の木製仮面と土坑出土資料について」『纏向学研究1』桜井市纏向学研究センター
横島勝則・丸山次郎編1998『大田南古墳群ほか』弥栄町教育委員会
渡辺貞幸1995「出雲連合」の成立と再編』『出雲社会と古代の山陰』名著出版